令和４年３月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　岩手県盛岡市内丸 10 番１号
管理機関名　岩手県教育委員会
代表者名　　佐　藤　　博

令和３年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記のとおり提出します。

記

１　事業の実施期間
令和３年４月１日（契約締結日）～　　令和４年３月 31 日

２　指定校名・類型
学校名　　岩手県立大槌高等学校
学校長名　継　枝　　斉
類型　　地域魅力化型

３　研究開発名
大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

４　研究開発概要
（１）学校設定教科「地域みらい学」の実施
学校設定６科目によるリベラルアーツカリキュラムの円滑実施
（２）学校設定科目「三陸みらい探究」による資質能力の育成
資質能力の育成に係る効果的な取組と３年間の指導体制の確立

５　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無
（１）学校設定教科・科目　　開設している
学校設定教科「地域みらい学」
学校設定科目「三陸みらい探究」「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」
「くらしｍａｔｈ」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」　６科目
（２）教育課程の特例の活用　　活用している
「総合的な探究の時間」１単位と「社会と情報」２単位から１単位を減じて「三陸みらい探究」に代替する。

６　運営指導委員会の体制

氏　名	所　属・役職等	備　考
牧　野　　篤	東京大学教育学部 教授	教育専門家

廣　田　純　一	岩手大学農学部 名誉教授	学識経験者
田　中　　潔	東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター 准教授	学識経験者
伊　藤　正　治	前大槌町教育委員会教育長	学識経験者

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアム体制

通番	機関名	機関の代表者名
1	岩手県教育委員会（管理機関）	佐　藤　　博
2	東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター	青　山　　潤
3	大槌町教育委員会	沼　田　義　孝
4	認定 NPO 法人カタリバ	今　村　久　美
5	大槌町	平　野　公　三
6	大槌町商工会	後　藤　力　三
7	大槌町立学校長会	松　橋　文　明
8	大槌町議会	小　松　則　明
9	大槌高校ＰＴＡ	菊　池　久美子

8　カリキュラム開発等専門家，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	菅　野　祐　太	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤
地域協働学習実施支援員	三　浦　奈々美	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤
地域協働学習実施支援員	小野寺　　綾	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

活動日程	活動内容
令和３年６月 14 日	令和３年度第１回運営指導委員会 ・今年度の活動について指導・助言
7 月 28 日	第９回魅力化構想会議兼令和３年度第１回コンソーシアム会議 ・令和２年度事業報告並びに令和３年度事業計画を協議、承認 ・全教員並びに地域協働関係者で意見交換会を開催
12 月 22 日	第 10 回魅力化構想会議 ・事業経過、関係機関との調整・要望を協議、承認
令和４年２月７日	第２回運営指導委員会 ・地域協働事業並びに今後の取組に対する指導・助言
3 月 23 日	第 11 回魅力化構想会議兼令和３年度第２回コンソーシアム会議 ・令和３年度事業報告及び令和４年度事業計画を協議 ・地域協働事業の総括

（２）実績の説明

ア　管理機関による事業の管理方法とコンソーシアムの構成について

復興推進のリーダーとなる人材の育成を目指し、大槌町役場、高等教育機関、地域、産業界、ＮＰＯ等がコンソーシアムを構築し、協働して子どもたちの実践的な学びを支援しながら地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問して事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

イ　カリキュラム開発等専門家について

菅野祐太（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

活動日程	活動内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組の進捗や運営指導委員会やコンソーシアム等開催された会議の内容を共有
不定期	・コンソーシアムによる魅力化に関する会議の企画・運営 ・教育課程検討会議に参加 ・町立学校コミュニティー・スクール等の会議に参加

ウ　地域協働学習実施支援員について

三浦奈々美（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

小野寺　綾（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

日程	内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組について共有
毎週１回	・１・２年生の総合探究の企画・運営 ・教員と打合せを行い、次回の授業方針を決定
令和３年７月 20 日	マイプロフィールドワーク ・各テーマに精通した地域の大人と出会うことを目的としたフィールドワークを実施した
令和３年９月 17 日	「大槌発みらい塾！」の企画運営 ・地域の方々による１・２学年向け職業講話の企画運営
９月～	・ＩＣＴ機器の活用・管理 ・オンライン探究連携の企画・運営
年２回	・地域協働事業の評価および集計・分析
年継続	・探究のルーブリック評価の構築
随時	活動の発表及び紹介 ・地域の中学校を訪問し中学生に高校を紹介 ・来校者に探究活動について説明・紹介

エ　管理機関における主体的な取組について

（ア）管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・大槌町からカリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員２名の配置

・管理機関による、継続的な取組を行うための教職員の特別加配１名

（イ）事業終了後の自走を見据えた取組について

本事業により開発した研究内容について、事業終了後も充実発展させていくとともに、

管理機関により、所管する高等学校へ広く周知していく。また、学校設定教科及び学校設定科目の実施について、適切な教育課程となるよう指導助言を行う。

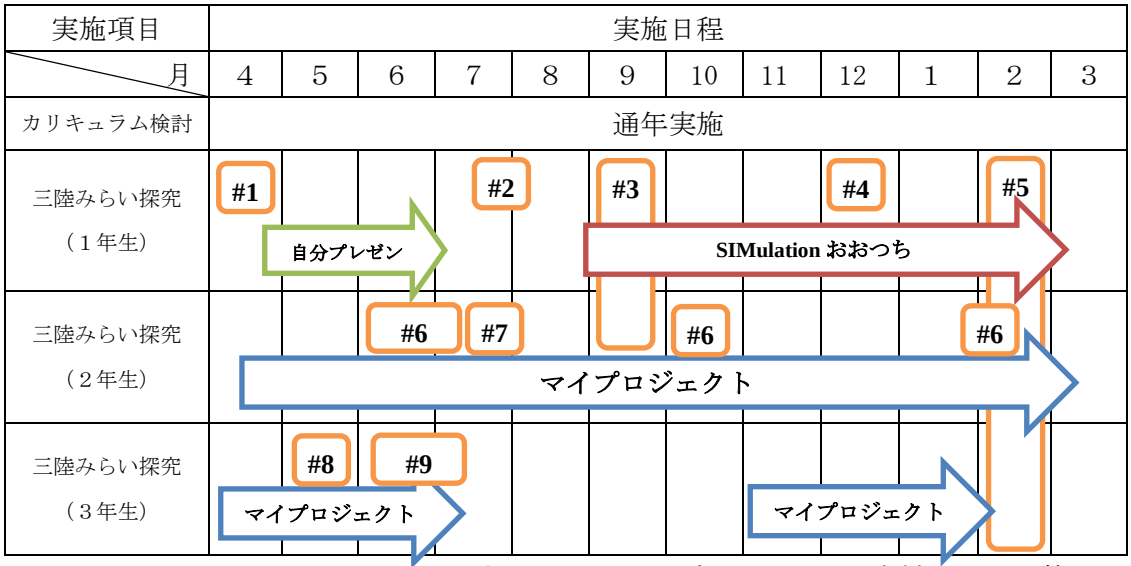
令和４年度から始まる本事業の後継事業である「新時代に対応した高等学校改革推進事業」への参画について検討し、全日制普通科としての在り方を柔軟に見直していく。

（ウ）高等学校と地域との協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

大槌町と大槌高等学校は「震災伝承推進活動に関する協定」を交わし、町の文化交流施設に本校の特徴的な取組である復興研究会の常設展示を行っている。

10　研究開発の実績

（１）実施日程



＃１：オリエンテーション　＃２：ちょこっとマイプロ　＃３：大槌発みらい塾！

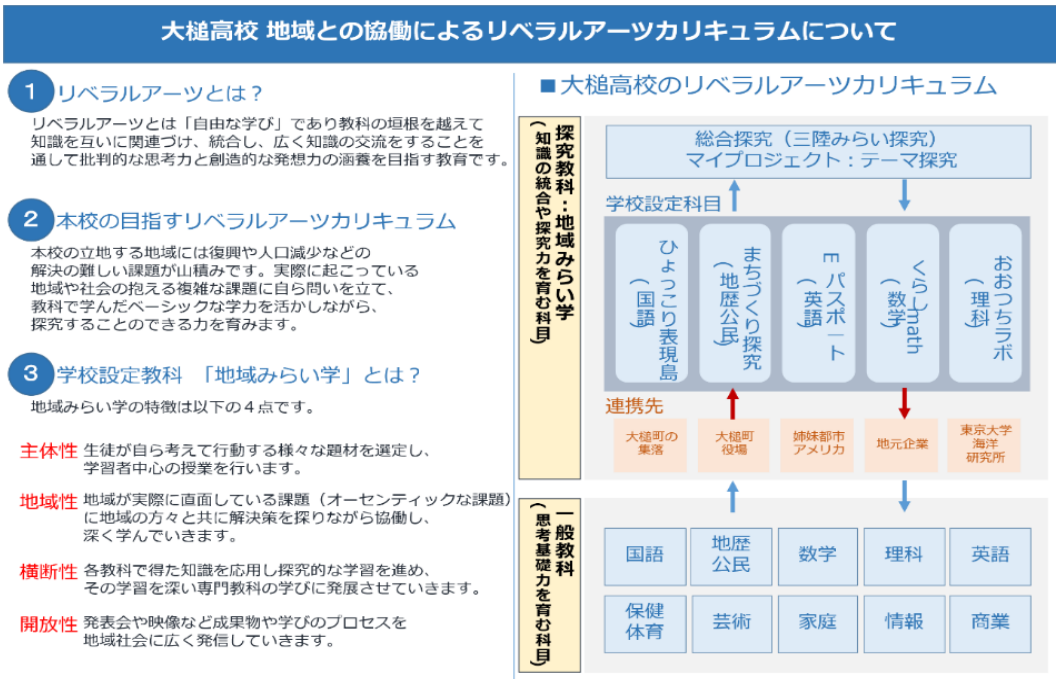
＃４：ラーニングジャーニー　＃５：探究発表会　＃６：online 探究連携交流授業

＃７：マイプロフィールドワーク　＃８：職業インタビュー

＃９：アカデミックオンラインディスカッション

（２）実績の説明

ア　研究開発の内容や地域課題研究の内容について



（ア）学校設定教科「地域みらい学」の実施

「総合的な探究の時間」の代替である「三陸みらい探究」を軸にして、５教科に探究的な学びを実践する科目を設定した。「三陸みらい探究」の中心はマイプロジェクトであるが、新しい学校設定科目ではそれぞれの教科の特性を踏まえながら、必要に応じて科目を横断的に接続しながら地域課題探究に取り組む。

科目名 学年・単位数	今年度の取組	今後の取組
ひょっこり表現島 ２年生 ２単位	［他地域の生徒へのインタビュー調査］全国で使用される方言を調査し、学級内で共有し合うことを通して自他で使われる方言を比較し、自分が活用する方言について理解を深めた。また、関西の学校とオンラインで連携し、方言の使用場面（話す相手や状況により使用言語が異なるのか）についてインタビュー形式の調査を行った。 ［方言地図の作成］大槌の 26 の方言（「ごんぼほる」「ひゃっこい」「のらすなよ」等）が釜石、鵜住居、大槌のそれぞれの地域における使用実態に違いはあるかを地図にすることで定量的に可視化した。 ［方言による地域ＰＲ動画］方言を活用して、大槌町・大槌高校を自分なりの視点で映像としてまとめる。他者視点を持ちながら制作を行う。	・今回の活動で興味を持った生徒は教育課程外の時間を活用して、さらなる探究の機会を得る活動を行う。 ・引き続き探究的な視点による学びや他関係機関との連携・継続性を担保する。
まちづくり探究 ３年生 ２単位	前期中間は身近なテーマ（「犬」と「猫」どちらを飼うか等）のディベートを通して主張の立論に重点を置いて取り組んだ。前期末は「大槌町と釜石市を合併すべきか」というテーマで議論し、立論の背景となる町の課題について理解を深めた。 後期中間はデザイン思考で課題を解決することを目指し、「学校の課題をデザインする」ことをテーマに学習を行った。校内で交流が生まれることを狙った「子ども食堂」の設置や「校内表示盤」の改良など具体的な意見が出された。後期末は町の交流センターの課題を解決するというテーマで「若者への震災伝承の方法について考えよう」など、解決策を提案した。	・課題を構造的に捉えることができる効果的なインプットの機会を拡充する。 ・次年度以降は教科の学びとの接続を図る。公民科目と関連付け、教科と探究の横断を図る。
くらしmath ２年生 ２単位	前期は、商業活動における数学の活用について学んだ。料理の原価を計算で求める方法を学んだ後、生徒自身がメニューを決めて、必要な材料とその費用を算出した。さらに、売価も想定して、効率的に売上を上げるための計算を連立方程式から求めた。 後期は、日常で使われている道具を用いて数学の関わりを学んだ。建物の高さをメジャーと角度から算出することについて、Ｅｘｃｅｌを活用して計算し、レポートにまとめた。これまで学んできた手法を活用し、現在は大槌町をデータから数学的に考察する活動を行っている。	・大槌町を数学的に考察する経験を活かして、今後は他の市町村との比較にも取り組み、大槌町の課題を数学的に捉える機会とする。
Ｅパスポート ２年生 ３単位	前期で身につける資質能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるカナダ・トロントへの「留学」をテーマに、ホストファミリーへの自己紹介やお土産、自分の学校等を紹介するというプレゼン資料を作成した。生徒たちは、英語を母語にする人とも意思疎通できることを学んだ。 後期は身近にある複雑な事柄について伝えるという取組を行った。防災グッズ等災害に関わることや、大槌を１日満喫できるプランについて、大槌の姉妹都市出身のＡＬＴにオンラインによるプレゼンを行った。また大槌で生活する外国人を授業に招き、身近にいる外国人について意識する機会を設けた。	・外国人に向けた大槌の紹介映像を作る等の取組に発展させる。積極的にフィールドワークを行うことを通して、より身近なテーマで表現する機会を作る。
おおつちラボ	日常生活における身近なことから調べたいテーマを設定し、仮説を立て、調	・フィールドワーク

３年生 ３単位	べ学習によって検証する過程を学んだ。また、仮説に対して、自分なりに実験等を行い、データを活用して検証する過程を学んだ。例：「カップ麺は鍋で煮たら早くできるのか。」「本当にシャボン玉は雨の日割れないのか」 地域課題とＳＤＧｓに注目し、食糧問題、医療、海の生態系等の理科的な到達目標に関して調査を行った。国・企業・県・大槌や釜石市の成果と課題や取組の現状把握を行った上で、町をより持続可能にしていく視点を提案するため、他の市町村の取組について、効果の有無を検証し卒論ポスターとしてまとめた。例：「どうしたらごみの量を減らすことができるのか」「無人バスをどのようにしたら走らせることができるか。」	や、出前授業の機会を増やす。また郷土財エリアなどを題材に、自然保全について考える授業を組む。自分なりに課題を見出し、理解できるような基礎的学力をつける。

（イ）学校設定科目「三陸みらい探究」による資質・能力の育成

［１年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月～７月	<u>自分紹介プレゼンテーション</u> 探究を進めていくために必要な課題設定力を育むために、自己発見・自己理解を通して自分なりの視点を獲得した。自分を紹介するプレゼンテーションを作成し、町内の中学生に発表した。	**［表現し内省する］** 相手に伝わるよう表現することを通して、自己を内省する。
８月	<u>１週間マイプロジェクト</u> 自分が普段気になっていることから、１週間で実施できるプロジェクトを設定し、プロジェクトによって解決できたことを振り返った。	**［課題解決の枠組みを知る］** 身近なテーマで小さなプロジェクトを実践し、課題解決の方法を知る。
９月	<u>大槌発みらい塾！</u> 町内外で働く大人（大学生３名含む）10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後の進路や、地域社会との関わり方について考えた。	**［生き方を考える］** 他者の生き方に触れることを通して、自らの生き方について考える。
10 月～２月	<u>SIMulation おおつち 2030</u> 理想とする町の姿を考え、町にある地域課題の解決策を構想した。地域課題は、町の総合計画に掲げられた分野に沿って大槌町議会に設定していただいた。10 月、課題の現状理解を目的に、大槌町議会議員による講義や、町役場においてヒアリング調査を実施した。12 月、解決策の先進事例を知ることを目的に、町外の自治体や民間団体を訪問し、フィールドワーク調査を実施した。２月に校内で発表会を実施した。	**［地域課題を知り、解決のための方策を考える］** 町内の地域課題を題材に、課題解決のための方策を考え、提案を行う。

［２年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月～７月	<u>マイプロジェクト①テーマ設定</u> 短期間でのプロジェクト活動や大人への相談活動を通して、個々人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定した。 **・ちょこっとマイプロジェクト** 個人で身近な題材から問いを設定し、１週間で調査を行い、得られた成果を報告した。 **・マイプロジェクト・フィールドワーク** 自分のテーマと似た活動に取り組む地域の方を訪ねて、体験活動やアドバイスをもらうフィールドワークを実施した。	**［マイプロジェクト探究に向けた課題を設定する］** 個人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定する。
９月	<u>大槌発みらい塾！</u>	**［地域と探究を接続する］**

	町内外で働く大人（大学生３名含む）10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後のプロジェクトの発展や進路選択に役立てる機会とした。	地域課題解決のモデルケースに触れ、マイプロジェクトに活かす。
９月～12 月	**マイプロジェクト②課題解決アクション実践** 課題解決に向けたアクションを行いながら設定した問いを探究することで、課題解決を行う資質能力を総合的に育成した。定期的に成果報告の機会を設け、考えを相手に伝える力を高めた。 **・ゼミ活動（10 月～１月）** 課題設定から解決策実施までの流れを繰り返した。テーマに応じてゼミに分かれ、教員が分担して生徒の活動を支援した。 **・オンライン探究連携（５月・７月・12 月・２月）** 山形県・熊本県の小規模校とオンライン接続し、互いの活動について発表しフィードバックする交流活動を定期的に実施した。 **・中間発表会（10 月）・最終発表会（２月）**	**［アクションを通して課題解決を学ぶ］** 課題解決を行う資質能力を総合的に育成する。

［３年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
４月～７月	**アカデミック・オンラインディスカッション（大学・短大進学、公務員希望生徒）** ２年次にマイプロジェクトで取り組んだテーマをさらに深めることを目的に、論文等を参考に新たな問いを設定した。問いを深めるために専門家に依頼し、オンラインで議論した。 **職業インタビュー（専門学校進学、就職希望生徒）** 就きたい職業に必要な能力を理解するために、社会人にオンラインでインタビューを実施した。自分の現状と必要とされる能力とのギャップや課題を把握し、解決するミニアクションを１週間で実践した。	**［マイプロジェクトを進路に繋げる］** マイプロジェクトでの探究活動を軸に卒業後の進路を考え、必要な力を育成する。
11 月～２月	**18 年間で身につけた“大槌(ハンマー)”と知見** オープンダイアログや人生グラフの作成を通して、18 年間の人生で身につけた“大槌(ハンマー)”（＝強み）を自分の言葉で表現した。探究活動等で関わった町民に向けて発表した。	**［探究での学びを総括する］** これまでの探究活動や学びを整理し、自分なりの言葉で表現する力を身につける。

イ　地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

令和元年度から学校設定教科「地域みらい学」を設定し、その中に総合的な探究の時間の代替として学校設定科目「三陸みらい探究」（５単位）を設置している。令和３年度からは学校設定科目「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」「くらしｍａｔｈ」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」の５科目を追加開設した。地域や社会の抱える複雑な課題に自ら問いを立て、教科で育んだ力を活かしながら、探究する力を育む。

ウ　地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

各科目に関連付けた探究科目である地理歴史・公民「まちづくり探究」、理科「おおつちラボ」ではそれぞれの科目で検討を行う枠組みを「理想の状態」「課題」「仮説の設定」「解決策」として共通させることで、生徒自らが設定した事象に対して社会的な視点、理科的な視点という違いを活かしながら、課題解決のフレームを学んだ。

探究的な学びを実践する５つの学校設定科目では各科目の特性を活かしながら地域課題を考え、解決方法を模索・表現することを目的としている。この過程において「三陸みらい

探究」で培った知識や技能、思考力や表現力を効果的に活用した。

エ　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラムマネジメントの推進体制

令和２年度に策定した新カリキュラムを今年度から実施している。

オ　学校全体の研究開発体制について

副校長とカリキュラム開発等専門家が事業の企画・運営の中心となり進めている。地域連携は地域協働学習実施支援員が中心となり週１回学年ごとに探究活動の進捗を確認・検討している。この検討には校内に配置されているコラボスクール（公営塾）のスタッフも参加している。新設した５科目についても定期的に授業公開や教員研修会を開催し指導内容・方法を情報共有している。

カ　カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員２名が職員室に席を持ち常駐している。入学者選抜関連以外の大槌高等学校のすべての職員会議に参加するなど、教員とともに教育活動を行っている。各学年に１人ずつ配置し、学年の活動に参加するなど、生徒の状況を把握しながら活動している。

キ　研究開発の進捗管理、ＰＤＣＡサイクルの実施について

研究開発・推進に関わる各施策は、校長の指示のもと副校長が主に担当しており、必要に応じて校務運営委員会や職員会議に諮られる。また校内で行う、中間反省会議や年度末反省会議で成果や課題について共有し、取組についての意見交換を行う。

ク　カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

新しいカリキュラムについてコンソーシアム会議や魅力化構想会議において協議した。委員からの指導・助言を学校設定教科・科目に反映した。また、「三陸みらい探究」における生徒の活動に対して指導・助言をいただいた。

ケ　運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

毎年度２回運営指導委員会を開催した。委員からは専門的な観点から活動計画や評価方法・検証等について助言をいただき、活動の改善を図った。

コ　類型毎の趣旨に応じた取組について

小規模高校は地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、自分と同様な興味・関心を持つ生徒や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。オンラインを活用することで学校の枠を越えて、類似のテーマで活動する生徒や、そのテーマに専門性を持つ大人と交流することが可能となる。そこでマイプロジェクトを行っている山形県立小国高等学校、熊本県立小国高等学校及び大槌高等学校の小規模校３校が集い探究交流授業を行った。生徒の探究活動のジャンルごとにグループを作り、グループごとに発表・質疑を行った。

サ　成果の普及方法・実績について

活動の内容や状況について学校ホームページで公開している。また、大槌町の広報誌に毎月活動の様子を掲載し町内へ広報している。

管理機関が実施する各種協議会等において取組を周知し、地域と協働した教育活動による学校の特色化・魅力化を推進している。

毎年、地域協働についての研究協議会を開催し事業の成果を発表している。昨年度に続き今年度もオンラインでの実施となったが全国から 100 名を超える参加があった。

11　目標の進捗状況、成果、評価

本事業申請時に提出した目標設定シートに準じて進捗状況の成果を検証する。

（１）卒業時に生徒が習得すべき具体的能力を測るものとして設定した成果目標

４件法によるアンケートの肯定的回答の割合

三菱 UFJ リサーチによる地域協働校対象の調査結果から抽出したもの。

番	設問	R1 入学生		R2 入学生		R3 入学生
		R1 入学時	R3 12 月	R2 10 月	R3 12 月	R3 12 月
1	**課題の発見と解決に必要な知識および技能**	67.9%	71.6%	59.4%	67.0%	48.3%
	―自分で計画を立てて活動することができる	73.8%	67.6%	56.6%	68.2%	39.0%
	―現状分析し、目的や課題をあきらかにすることができる	61.9%	75.7%	62.3%	65.9%	57.6%
2	**探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い**	71.4%	63.5%	51.9%	59.1%	50.0%
	―地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	76.2%	67.6%	52.8%	63.6%	50.8%
	―誰かに言われなくても自分から勉強する	66.7%	59.5%	50.9%	54.5%	49.2%
3	**課題発見・解決への指向**	76.2%	78.4%	67.0%	67.0%	66.1%
	―情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	81.0%	81.1%	69.8%	65.9%	64.4%
	―地域や社会での問題や出来事に関心がある	71.4%	75.7%	64.2%	68.2%	67.8%
4	**主体性・協働性**	65.5%	74.3%	58.5%	67.0%	59.3%
	―忍耐強く物事に取り組むことができる	64.3%	75.7%	67.9%	68.2%	55.9%
	―自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる	66.7%	73.0%	49.1%	65.9%	62.7%
5	**価値創造への提案と次へつながる学び**	64.3%	68.9%	55.7%	63.6%	50.8%
	―国や地域の担い手として、政策決定に関わりたい	47.6%	62.2%	37.7%	54.5%	37.3%
	―学習を通じて、自分がしたいことが増えている	81.0%	75.7%	73.6%	72.7%	64.4%

※実施会社の都合で毎年実施時期が異なった。しかし、Ｒ１・２入学生ともに資質能力の向上が見られる。Ｒ３入学生は入学から時間がたっており低い数値となっているが、入学時から２年生にかけて他校も含めて減少傾向にあるため最も低い時期での調査と考えられる。

（２）目標設定シートは別添

12　次年度以降の課題及び改善点

（１）研究開発に係る課題や改善点について

ルーブリック評価については、生徒自身が掲げる目標を項目として設定することが必要である。また、昨年度はルーブリックの精度が低く、評価に多くの時間を要したので、今年度は改善し実用的なものとした。ただし、より目標に基づいた自己評価の機会を増やすなど、生徒自身が総合探究を通じて目指したい姿を考える等の工夫が必要である。

今年度から開始した探究的な学びを進める学校設定科目においては各担当が試行錯誤を繰り返している。今後も常に検討を加え、より深い探究活動を行う科目に改善していく。

（２）今後の自走に向けた方向性について

県教育委員会では大槌高等学校の地域協働の取組を高く評価している。

地域との連携・協働、コーディネーターの配置、探究的な学びの充実及び目指す人材育成のためのカリキュラムマネジメントなど、県内の高校では最も先進的に取り組んできた。次年度以降はこれまでの取組を継続しながら、個別最適な学びと協働的な学びの効果的実現に向けて普通科の見直しを含めて検討していく。

【担当者】

担当課	学校教育室　高校教育担当	ＴＥＬ	019-629-6140
氏　名	中田裕治	ＦＡＸ	019-629-6144
職　名	指導主事	e-mail	nakata-yuuji@pref.iwate.jp